

国立国会図書館蔵『絵本武勇大功記』翻刻と解題

金 時 徳

要 旨 本稿は国立国会図書館所蔵「絵本武勇大功記」を翻刻し、注釈と解題を附したものである。本書刊行の背景には、浄瑠璃における天明・寛政年間の太閤記物ブームがある。毛谷村六助が加藤清正（本書では加藤正清）に仕えるまでの事情を描く本書巻上には、浄瑠璃「彦山権現誓助剣」との類似性が見られる。しかし、豊臣秀吉の朝鮮侵略のことを描く本書巻中・下の場合、その直接的な典拠は浄瑠璃ではなく、加藤清正の一代記である「清正記」・「朝鮮太平記」等の朝鮮軍記物の諸作品であることが確認される。一八世紀初期までの朝鮮軍記物の諸作品は軍記「朝鮮太平記」・「朝鮮軍記大全」に集大成され、絵本読本「絵本朝鮮軍記」・同「絵本太閤記」（第六・七篇）は一九世紀の朝鮮軍記物を代表する作品であるが、その間の一八世紀中・後期に著された朝鮮軍記物の数は少ない。本書は、朝鮮軍記物における一八世紀中・後期の空白を埋める作品として意味を持つ。

一、書誌情報

所蔵
表紙
寸法
題簽
装訂
内題・柱題
紙数
刊記
序文
作者
蔵書印
備考

国立国会図書館 刊本（中本）三冊 請求番号二二一―三〇四

紺地に金泥で霧と蜻蛉（紺色に金色）

表紙 縦 二二・四 cm 横 一五・七 cm

匡郭 縦 一八・二 cm 横 一三・一 cm

原のもの。「絵本武勇大功記 上（中・下）」（刷・左・双）

袋綴

なし（ノド丁付け…「上ノ二」から「下ノ九」まで）

二九丁（序一丁・広告二丁を除いて墨印五四面）

なし

半丁七行（寛政二庚戌年孟昏）

寺沢昌次（寛政二年（一七九〇）歿。絵師。大坂の人。晩年、木挽町中之丁に住む。

以上、『国書人名辞典』による）

「河内屋九郎八」（墨）、「帝国図書館蔵」（朱）、「購求・明治三三・三・三一」（朱）

「福寿軒絵本目録」一丁。上方の書肆である福寿軒・菱屋治兵衛の絵本。早印本。巻上の裏表紙メクリに、アラビア数字と思しき墨字と、「〇川」（朱）。『日本古典籍総合

目録』（国文学研究資料館データベース）により本書の現存状態を確認すると、『国書総目録』には国立国会図書館所蔵本（本稿の底本）のみが載っており、国文学研究資料館の調査によって蓬左文庫（二冊）・住吉大社御文庫（一冊）の二ヶ所の所蔵が確認されている。その内、蓬左文庫本は巻下のみ、住吉大社御文庫本は実物を未確認ながら、書肆が山城屋佐兵衛となっていることが分かる。因みに、『国書総目録』では本書の刊年を寛政元年としている。『享保以後大阪出版書籍目録』には「武勇大功記／三冊／作者／寺沢昌次（木挽町中之丁）／板元／和泉屋彦兵衛（備後町四丁目）／出願／寛政元年十月」とあるが、底本から確認できるのは、序文の「寛政二庚戌年孟昏」のみである。

二．解題

「絵本武勇大功記」の「大功」とは、浄瑠璃・歌舞伎において豊臣秀吉の官職名「太閤」の代わりに使われる言葉であり、「大功記」とは、豊臣秀吉に関する作品群を指す言葉「太閤記」の代わりに使われる言葉である。即ち、本書は演劇の「大功記」を「絵本」化した作品であることが、その題名から分かる。本書の内容を簡単に紹介すると、巻上には、毛谷村六助けやむらうくすけが加藤正清かとうまさよ（加藤清正の演劇における名前）に仕えるまでの事情と、大功久吉たこうひさよし（太閤豊臣秀吉の演劇における名前）が朝鮮侵略を宣言してから日本軍の渡海に至るまでのことが記される。毛谷村六助に関する部分は、浄瑠璃『彦山権現誓助剣』ひさまねごんねんちかいのすけだち（天明六年（一七八六）一〇月初演）の内容に類似するが、細部では違

いが見られる。巻中・下には朝鮮侵略のことが述べられる。主な登場人物は、貴田孫兵衛に改名した毛谷村六助、木村又蔵、後藤又兵衛らである。本書に登場する毛谷村六助・大功久吉・加藤正清・木村又蔵・後藤又兵衛らは、天明・寛政年間に盛んに上演された、浄瑠璃の太閤記物にもよく見られる人物であり、本書刊行の背景には、このような「太閤記物」ブームがあったと思われる。松崎仁氏によると、太閤記物ブームの「基盤には大坂人の太閤びいきの感情がある。その積み重ねの成果として実録本『太閤真蹟記』十二編三百六十巻が時あたかも天明年間に成立した。(中略) 天明期は太閤記への関心が非常に高まった時なのであった。⁽¹⁾ この時期に上演された浄瑠璃作品のうち、本書と関わって注目されるのは、『彦山権現誓助劍』やその後編に当たる『大功艶書合』(同七年十月初演)・『韓和聞書帖』(同七年十二月初演)である。この三書の梗概を先行研究から引用する。『彦山権現誓助劍』では、「武術力量兼備」・「親孝行者」の毛谷村六助像に焦点があり、許嫁のお園に助太刀して仇討ちを果たし、豊臣秀吉の朝鮮侵略(文祿・慶長の役、朝鮮では壬辰倭乱と命名する)に加わったと結尾で語られるが、本作(『大功艶書合』)引用者では、その後日が展開され、『大功艶書合』という題名や、「瀬川采女さま参る菊より 貴田孫兵衛さま参る園より」とある角書から窺えるように、瀬川采女とお菊、貴田孫兵衛とお園・朝鮮人女性蘭麝などの恋物語、及び晋伯と玉欄女夫婦の物語が取り合わされている。⁽²⁾ また、浄瑠璃『韓和聞書帖』は『大功艶書合』(九段構成)の評判に追随した朝鮮攻め物である。貴田孫兵衛が主に活躍するのは、六段目「蔚山箆城の場」である。⁽³⁾ 三書の内容は以上のごとくであるが、これを本書と対応してみると、浄瑠璃『彦山権現誓助劍』は本書の巻上に、浄瑠璃『大功艶書合』・同『韓和聞書帖』は巻中・下に当たる。しかし、本文に施した諸注釈によって明らかになるように、本書巻上と浄瑠璃『彦山権現誓助劍』・実録『豊臣鎮西軍記』(書写年代未詳)の間には多くの共通点が認められるが、豊臣秀吉の朝鮮侵略のことを描いた本書巻中・下と『大功艶書合』・『韓和聞書帖』とは殆ど対応し

ない。例えば、本書巻中に登場する晋伯と浄瑠璃『大功艶書合』の晋伯との間にはあまり共通性がない。また、本書巻中には加藤清正の女直攻め（とらんか）のことが描かれているが、浄瑠璃のヒロインであるお園（まお）の姿はそこにはない。では、本書巻中の女直合戦譚はどのような作品に基づいているのであろうか。その候補は、豊臣秀吉の朝鮮侵略のことを描いた「朝鮮軍記物」（『日本古典文学大辞典』に立項）である。「朝鮮軍記物」の諸作品は、戦争直後から著され始め、宝永二年（一七〇五）刊行の軍記『朝鮮軍記大全』・同『朝鮮太平記』を以て集大成された。両作品を朝鮮軍記物の集大成と称する理由は、この戦争のことを描いた、日本・中国（明王朝）・韓国（朝鮮王朝）で著された諸作品が二作品に収斂され、また、二作品によってまとまった内容は、大きな変化を見せずに受け継がれていったからである。本書に関していえば、巻中の女直合戦譚は、軍記『清正記』（きよまさき）（寛文三年（一六六三）刊）・『統撰清正記』（とくせんきよまさき）（寛文四年（一六六四）刊）などの、加藤清正の一代記的な諸作品や軍記『朝鮮太平記』のそれに類似する。これは、本書巻中・下の全体に関して指摘することができる。本書の刊行は、浄瑠璃における天明・寛政年間の太閤記物ブームに触発されたことは確かであるが、その内容は軍記『朝鮮太平記』・同『朝鮮軍記大全』などの朝鮮軍記物のそれに近い。一八世紀初期までの朝鮮軍記物の諸作品は『朝鮮太平記』・『朝鮮軍記大全』に集大成され、絵本読本『絵本朝鮮軍記』（寛政一二年（一八〇〇）刊）・同『絵本太閤記』第六・七篇（享和元（一八〇一）・同二年（一八〇二）刊）は一九世紀の朝鮮軍記物を代表する作品である。ところが、その間の一八世紀中・後期に著された朝鮮軍記物の数は少ない。そんななかにおいて本書は、朝鮮軍記物における一八世紀中・後期の空白を埋める作品として意味を持つ。（3）

三、
翻刻

翻刻の方針は、漢字は通行の字体に改め、清濁・振り仮名はそのままにした。□は巻の上・中・下、○は丁数を表す。

【巻上】

(一オ・一ウ)

序

毛谷村六介秀ひいでしは孝心の徳とくにより彦山権現ひごんこんげんの神かみの冥加めうがの著明いちじるしき加藤正清とうまさきよの軍将ぐんしやうに撰えらはれ韓国の軍忠ぐんちゆうあげてかぞへがたし忠臣ちゆうしんはかならず孝子の門もんにもとむといへるむべも富ける言葉ことば哉かないま今やお、けなくも聖の君ひじりの君きみの統御みよしろしめすたいへい太平たいへいの御おんいつくしみ四海しかいに普あまねき折おりから六助ろくすけが高名かうみやうの数々かずかずをうつして兒童じどうのもて遊びとなせるも聊いささ壤かつちくれを撃うてうたひしいにしへに倣ならんかも

寛政二庚戌年孟昏

青燈下

【字釈】○彦山権現…彦山・英彦山は「福岡県田川郡添田町と大分県下毛郡小国町との境にある山。標高一一九メートル。中岳、北岳、南岳の三つの峰から成っている。中岳の頂上を上官といい、英彦山神宮がある。主祭神は、天忍穗耳命あまのおほみみのみこと。平安初期までは「日子山」とよばれていたが、嵯峨天皇の勅により「彦山」、さらに江

戸時代には靈元法皇から英の尊号を受け、以来「英彦山」と呼称するようになった」（『日本伝奇伝説大事典』）。

○加藤正清・浄瑠璃・歌舞伎における加藤清正の名。○お、けなくも…恐れ多くも。○壤を撃てうたひしいにしへ…いわゆる「鼓腹撃壤」の故事を指す。○寛政二年…一七九〇年。

(二オ)

毛谷村六介は彦山のふもとにて異人いじんにあひて兵法へいぽうの一卷いちばんをさづかり奥義おくぎを極めしは是高良明神こしからめうじんの神力しんりきなり

【字釈】○兵法の一卷…『彦山権現誓助劍』第二段「我は高良の神の使此一卷は汝が好ける劍術奥義を記せし秘巻、只今授与ふる間家に帰つて開き見よ、四海を撫づる劍の威徳、皆其中に有るべし」。

一「先祖の由緒を知らんとならば、今宵宿所に帰り、汝が家の東北の隅を掘つて見よ、大きな石あるべし、其石を取退れば櫃あり、其中に黒塗の箱有らん、夫れこそ汝が家の系図なり（中略）其中に系図の巻物と覺しき一卷あり（中略）今夜を始めして三七日の間夜毎に此所へ来るべし、劍術、力量、其のほか、兵法の深秘を授け得さすべし」。

○高良明神…高良明神たかのあきのかみ高良大社。筑後国三井郡。現福岡県久留米市御井町。主祭神の高良玉垂命たかたまたれのみことは神功皇后の三韓征伐を援助した功でまつられたもの。

【解説】図版①。『彦山権現誓助劍』第二段に当たる場面。しかし、高良明神は吉岡一味齋よしおかいちみさいの変身である、との設定は、本書には見られない。

(二ウ・三オ)

吉岡一味齋よしおかいちみさいが後家ごけおかう二人のむすめをつれ毛谷村六介けやむつが劍術けんじゆつの指南しなんせしを尋行たづねゆきかたき討うちのすけ太刀たちを頼みて東こ

図版①



久も聖此君り洗儀太平法勝つ川
 幸四馬小童は初々六劫が高名始
 初々を川に中迎童の極公もせ
 初も柳壊を撃くくくくくくくく
 有り假んくも
 寛政一四年孟春
 青煙下

く内匠が行衛を聞て終に本望をとげたりけり

【字釈】○おかう二人のむすめ・お幸と、娘のお園・

お菊を指す。○東ごく内匠・京極内匠。『彦山権現

誓助劍』初演番付に「東極内匠」とる。

【解説】『彦山権現誓助劍』第九・十段に当たる場面。

(三ウ・四オ)

毛谷村六介は大功の御前にてすもふをとり我にかちし者を主人に頼んと諸大名のか、への力者御用木又はいたち川などいふ角力とりをなげ次に加藤正清が家来にまけて加藤が臣となり貴田孫兵衛宗春と名のり武勇をあらはせしなり

【字釈】○大功・「太閤」豊臣秀吉。○御用木・未詳。○いたち川・『彦山権現誓助劍』初演番付にも見られる。○貴田孫兵衛宗春・『豊臣鎮西軍記』では「貴田孫兵衛統治」。

(四ウ・五オ)

喜田孫兵衛一味齋が後家娘が力と成て敵東ごくたくみを討してのち姉おそのを十木伝五右工門とふうふ二なしおさくを妻としてながく契りをむすびしとなり

【字釈】○おその…お園。吉岡一味齋とお幸の長女。○十木伝五右工門…『彦山権現誓助劔』では「轟伝五右衛門」。『豊臣鎮西軍記』では「十時伝右衛門」。○おきく…お菊。吉岡一味齋とお幸の次女。

【解説】『彦山権現誓助劔』第一一段に当たる場面。本書ではこの段を以て『彦山権現誓助劔』に近い内容が終わり、「朝鮮軍記物」に近い記事が始まる。この段以降、毛谷村六介（改名して貴田孫兵衛・木田孫兵衛等と呼ばれる）の登場は少なくなり、木村又蔵・後藤又兵衛など、朝鮮軍記物における伝統的な人気者たちの活躍が目立つようになる。

(五ウ・六オ)

大功ひさよし公清水寺にて異国せめの事をおぼし召たち給ふ

【解説】『朝鮮軍記大全』巻一・『朝鮮太平記』巻三に当たる記事。

(六ウ・七オ)

大功久吉公加藤正清に妙法蓮華経の旗をあたへ朝せんせいばつの先陣をゆるしたまふ

【解説】『清正記』巻二「加藤には高麗国にての制札並軍書一卷に南無妙法蓮華経の御旗を下し玉ふ」。(10) 『朝鮮太平記』巻四も同じ。

(七ウ・八オ)

福嶋左近は久吉公の御前にて申上けるは正清が小西の家来を加古川にて討し事は小西が所為甚あしきゆへなりこ
れは常く君御てうあひの氏きつねきし田のほたるなどの言を用ひ給ふがゆへなり己後御つ、しみあるへしとつよ
くかんげんを申上けるとなり

【字釈】○正清…「正清」を間違つて「正清」と刻んだ。

【解説】ここに描かれている事件については未詳。

(八ウ・九オ)

小西行長九州にて木山たん正が籠れる城をせめけれどもつよくふせぎてせめあぐみければだん正城より討て出行長
を追ちらしければ加藤正清是を聞後へ廻り家臣木村又蔵貴田孫兵衛飯田井上などの人々人ばしごをくみて岩角をつ
たひけんそ成岩山をのぼりて終に城をのつ取けるとなり

【字釈】○木村又蔵…毛谷村六介とともに、加藤清正の家臣として有名な武将。加藤清正の一代記である『清
正記』の作者とされる。○木山たん正…木山弾正。『清正記』巻二「志岐の城為後詰天草伊豆守両所より木山
弾正と云者を頭として(中略)木山弾正は天草を出し時一戦せずんは帰陣すましきと誓文を立し事をむねにお
さめ是非主計頭と一戦と定め清正の陣所の上山に陣を取清正行長へ使者を以被申しは弾正は我と一戦を定でた
る躰也」。○けんそ…險阻。○飯田井上…加藤清正の家臣である飯田角兵衛と井上勘兵衛。

【解説】ここに描かれた戦いは天正一七年(一五八九)の出来事で、朝鮮侵略以前の時期に属する。



(九ウ・十オ)

木山だん正加藤正清を討んと山へせめのほり正清の小勢をひつつ、み討んとす正清はだん正とくみあひて谷その水中に飛入ける加藤が臣貴田孫兵衛木村又蔵などの勇士山上より様子をうかがふにだん正水中より顕れ岩の上にて息をつぎ居る所を正清頓てをどり出短刀を手裏剣に討終にだん正を討取る

【解説】図版②。底本には、絵本と見られる作品の残欠半丁分が挟まっており、「たくみかけうちければかくはんはそのま、むなしく成ける」との文章が書かれている（図版③）。残欠の絵柄は、本書巻上の十才上段の絵柄に類似している。「かくはん」は、浄瑠璃『義経千本桜』等に登場する覚範を指すと思われる。ただし、残欠では「かくはん」が崖に落ちて死ぬことになっているが、『義経千本桜』「第五吉野山の段」では、覚範が義経に首を討たれる設定になっており、この場面とは異なる。

図版③



(十ウ)

毛谷村六介は貴田孫兵衛と成り朝せんせいばつの兵船にて人々帆ばしらを立るを見て孫兵衛老人にて帆綱を引立てける又二百五十貫目の大いかりをひき上げる誠に無双の大力なり

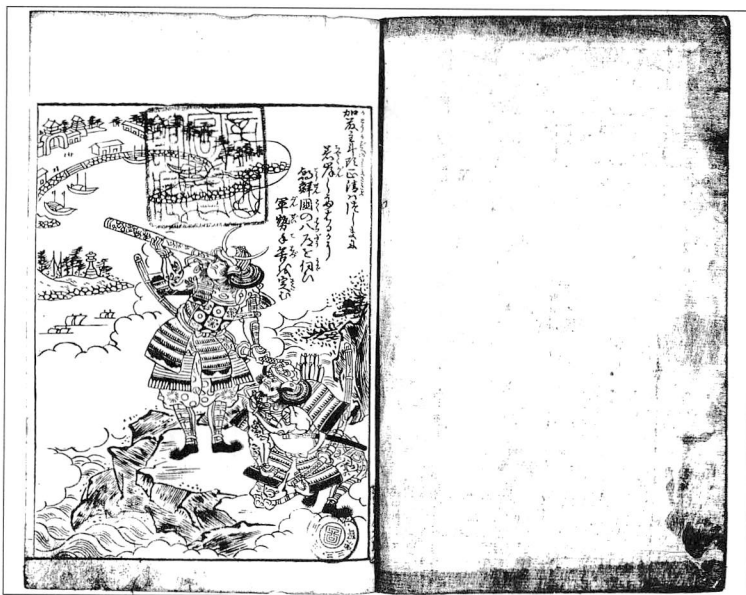
【巻中】

(一オ)

加藤主計頭正清はつしまに着岸してはるかに朝鮮国の八道を伺ひ軍勢手筈を定む

【字釈】○手筈…「ある事を行うのに、まえもって決めておく一定の順序。また、まえもってしておく準備」〔日国〕。

【解説】図版④。この段には、加藤正清が対馬で朝鮮侵略の戦略を練ったと記されているが、実際は、侵略の基本計画は、名護屋に在陣していた豊臣秀吉によるものであったことはいままでもない。



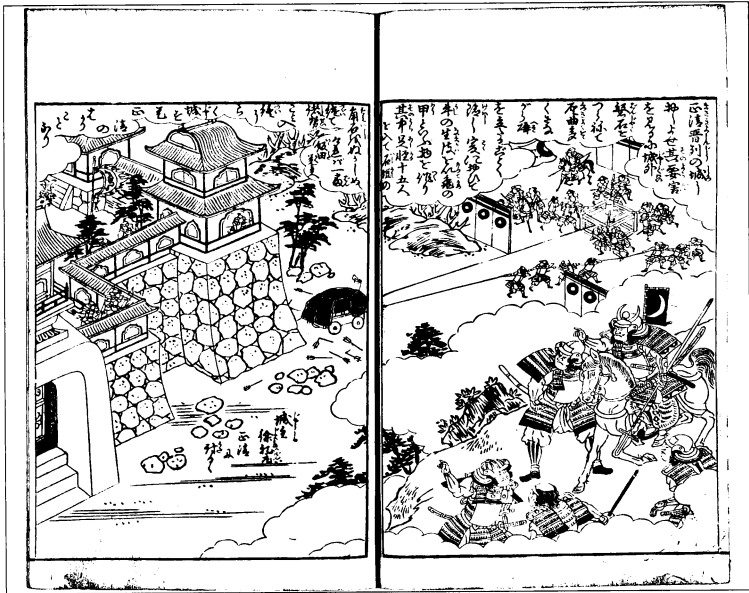
(一ウ・二オ)

正清晋州の城におしよせ其要害を見るに 城外 磬石を
つらねて 屈曲多くさながら壁を立たるとく 険し爰にお
ひて牛の生皮を以亀の甲といふ物を作り 其中足軽十五人
を入れて石垣の角石をぬかしめければ 一番飯田覚兵へ 続て
諸勢こみ入終にらく城す是正清のはかりことなり

《二オの下段》 城主徐礼元正清に討る、

【字釈】 ○牛の生皮を以亀の甲といふ物を作り…

『清正記』卷二「数百疋の牛を毛を内になし亀の甲
を作らせ其内に足軽を自由を振廻によつて火矢も
あたらす石垣のすみの大石をはねはつし七八間崩れ
たり」。(12) 『朝鮮太平記』卷一四も同じ。『朝鮮軍記大
全』卷二三では「韃韃車」。(13) ○一番飯田覚兵へ…
『清正行状・奇』には、「一番森本儀太夫一久乗上
ル。向膝ヲ鉄炮ニテ打セ流落」した後に、後藤又兵
衛・堀久七が乗り、飯田角兵衛は「一番首ヲ取テ。
甲斐守ニ見セ。一番乗一番首ト言ヲ放ツ」。(14) ○徐礼
元…第二次晋州城の戦いの際、晋州城の牧使。「牧使」



とは、朝鮮時代に二十カ所置かれた「牧」の行政・軍事を管轄した官吏である。「本曾判官」のモデルでもある。⁽¹⁵⁾

【解説】図版⑤。特に加藤清正系統の朝鮮軍記物においては、金時敏が牧使であった際に起こった第一次晋州城合戦（文祿元・一五九二）と、徐礼元が牧使であった際に起こった第二次晋州城合戦（文祿二・一五九三）とが混同される傾向があり、本書は、第一次晋州城合戦には触れない。

（二ウ・三オ）

小西行長が家来てうせん国の民家が乱入し財宝布木綿などをうばひ或はみめよき女を連かへり陣中にてなぐさまんと引立行途中にて加藤正清是を見て大にいかり汝等陣例を知らざるや盗賊同前の所為不届なりとてかすめとりし財をかへし女をもことごとく縄目をゆるし正清是を救すと免書を渡し帰されける異国の貴賤よるこび感じあへり



【解説】『清正記』巻二「小西一手の衆乱妨をいたし布もめんの類を大分取牛馬につけ来るに付て路次のはかゆかず清正行長に対面し被申けるは都へ上着におゐては巻物の類みちくたるべしか様のものは何の役に立へきぞ爰にて令放火身をかくくせては如何と被申ければ行長尤と出して乱妨の物とも悉放捨す」¹⁶⁾。『朝鮮軍記大全』巻六所収の記事も同じ。

(三ウ・四オ)

加藤正清かとうしょうせいでうせん大明の大軍と数度の戦ひに討かちかうさんの唐人とうじんどもをげんぶくさせ陣中ぢんちゆうにて召つかひあはれみ其のち帰朝のみぎりは金銀きんぎんをあたへ本国へゆるしかへさるゝ智仁勇ちじんゆうの大将なりとて今の世までも尊敬しけり

【解説】図版⑥。近松門左衛門の浄瑠璃『国姓爺合戦』以来の趣向に同じ。この箇所合致する内容は、朝鮮軍記物の諸作品には見られない。もしくは、戦後、島津家が中国人捕虜を送還したことを意識しているか。

図版⑦



（四ウ・五オ）

正清行長と鬪して南大門に向はる、道にて漢江といふ大河有渡し舟悉く打破あり遼向ふの林の中に軍兵あまた弓矢をつがひたる躰也正清あやしみ急度見渡し森の内にむれ居る鳥をながめ是全葉人ぎやうなる事をさつし人々大に笑ひける是正清の勢共をまどはし小西が先陣一人の高名にせんためにこしらへたくみしなり

《五ウの中・下段》正清漢江をやすくとわたし都にせめ入給ふ

【解説】図版⑦。「続撰清正記」巻二、【朝鮮軍記大全】巻七、「朝鮮太平記」巻六に同じ。

（五ウ・六オ）

慶州の古都に晋伯まもり居けるが日本勢せめ来ると聞大ニおそれおとろき城をすて、逃ざりける正清城中に入るかゞひけれども何の計もなく食物数多あるを郎等既ニ喰んとせしを正清せいしとゞめ城内魚鳥生類にためしみればはたして毒を仕込おきたり

【解説】『続撰清正記』卷二⁽¹⁸⁾には、釜山浦近くの民家での出来事として記されている。『朝鮮軍記大全』卷六、『朝鮮太平記』卷四の関連記事は、この出来事には触れない。

(六ウ・七オ)

夫よりそれ正清女直まさよをらんかいにせめ入らる此所の民家みんかごとくくこんぶ 悉いへ 昆布にて家をつくれり雑兵ざうへうどものき端はよりてこんぶをむしり喰くらふ内うちよりとがむる声こゝろを和音わおんに通つうじければ正清いぶかり尋たづねらるくほんらいわじん三元来和人也ことひさ此地せんねんなんぞ三すむ事久し先年難風せんねんなんふうに此所きたに来る由よしを申まう上る正清よろこひかれ悦よろこび彼がな名なを後藤次郎ごとうと改め案内あんないとせらる此所未申ひつじえるに富士山見ゆ人々ふじさん故郷こまやうニかへるのおもひをなせり

【字釈】○女直をらんかい…女真ともいい、ここでは元良哈おらんかいを指す。『朝鮮軍記大全』・『朝鮮太平記』も同様の表記。「元

良哈…文祿の役に加藤清正が進撃した豆満江外の地域で、女真人(野人)の住地。当時、この地方は、清太祖ヌルハチ同族の勢力下にあった。もと女真の部族名から出た呼称(『国史大辞典』)。朝鮮王朝で彼らのことを指す言葉「オランケ」が転化して「オランカイ」になったと考えられる。○此所の民家悉昆布にて家をつくれり…朝鮮軍記物には、「さいしゅう」・「済州」・「せいしゅう」等と呼ばれる地域にたどり着いた加藤清正軍が、昆布で屋根を作った家を見つけるといふ内容が頻出する。挿絵についていえば、本書及び『繪本太閤記』六篇卷五などの挿絵には屋根の上に昆布が描かれていて、『繪本朝鮮軍記』や有名な『富嶽百景』「元良哈の不二」などには描かれていない。○此所未申(19)に富士山見ゆ…浮世絵などで有名な場面であるが、その「未申」といふ方向に関しては検討すべき点がある。

【解説】凶版⑧。『清正記』卷二「せいしゅうと云所に着陣す此所にせるとす將軍人数を集め居住の由(中略)此所にて後藤といふ通詞を一人生捕此後藤と云者日本松前の者也獵船に乗風にはなされせい州へ着二十年彼所



に居住するによつておらんかい口をも朝鮮口をも日本口をも自由につかいよき通詞ゆへ清正重宝せられ則二郎と名づけあなたこなたへ案内者を申付られしせい州より天気能時は日本の富士山見ゆる彼所より富士山は未申にあたり松前よりは北也せい州にも昆布にて家の屋根をふき人民居住す⁽²⁰⁾。以下、本書におけるオランカイ関連の記述に一番近い朝鮮軍記物の作品は『朝鮮太平記』である。『朝鮮太平記』巻七・八の当該箇所と比べると、『朝鮮軍記大全』巻九の記述は粗略である。

(七ウ・八オ)

貴田孫兵衛宗春はおらんかいゑんたんかたて籠りし城へ只一騎ぬけがけて敵を討事三十人にあまりたり森本にいこんあるを以、足もひかざれば城勢もふせぎかねて斧まさかりのごときの物のふるごとくに投げる故闇夜の事なればあいろもわかざればせめあぐんでぞ見へたりける

【字釈】○ゑんたん…加藤清正系統の作品群には仮

名で表記され、「朝鮮太平記」巻八には「延贍」⁽²¹⁾となつてゐる。また、朝鮮軍記物においては、ここでの戦いで貴田孫兵衛が戦死することになつてゐる。○まさかり・鉞。○あいろもわかざれば…「文色も分かざれば」。見分けもつかなかつたので。

(八ウ・九オ)

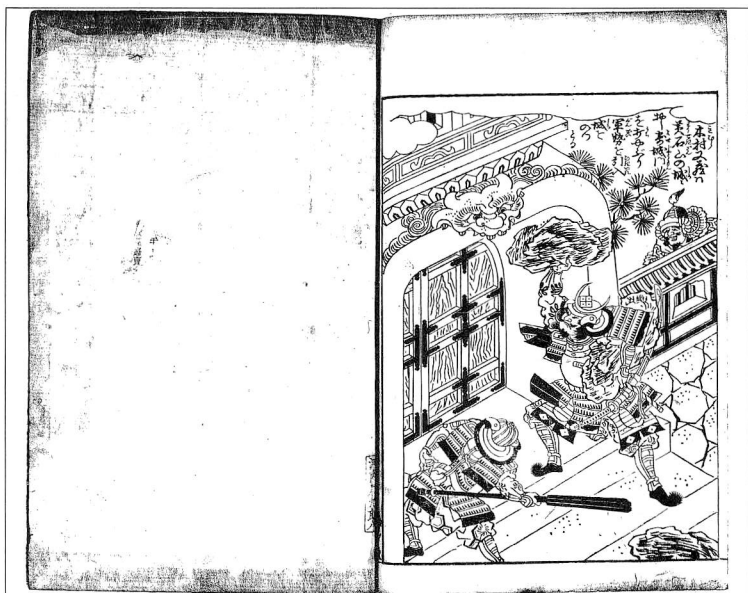
大將久吉公肥前名古屋に御在陣の間御なぐさみのため無礼講を御ゆるしあり家臣商人のまねをし中にも片岡造酒頭は魚屋と成り売あるきけるを久吉公よびとめ給ひさかなを買んとありければ片岡錢ありやかかけには致さぬなりと申ければさすがの大將も是にはこまり給ひし也

【字釈】○名古屋…名護屋のこと。○かけには致さぬ…掛け。「金銭の支払いを後でする約束で行なう売買。かけ売り。かけ買い」(『日国』)

【解説】豊臣秀吉の伝記である小瀬甫庵著『太閤記』(寛永二年(一六二五)自序)巻一五以来の有名な場面。
(九ウ)
木村又蔵は黄石山の城ニおし寄城門を打やぶり軍勢を引入城をのつとる

【字釈】○黄石山の城…「清正行状・奇」同七月七日。黄石山ヲ攻メ。鉄炮ヲ稠ク放チ。竹東ヲツケ柵ヲ結ヒテ。昼夜四日責囲ム。⁽²²⁾

【解説】図版⑨。黄石山の戦いは、韓国・朝鮮王朝の官僚であつた柳成竜の著『懲愆録』の日本将来とともに日本に知られるようになり、加藤清正系統の作品群の中でこの合戦の記事を載せているのは『清正行状・奇』



ぐらいである。『朝鮮軍記大全』巻三一、『朝鮮太平記』巻二〇。ただし、どの作品にも、黄石山城は陥落されなかったと記されていて、本書の描写は虚構である。一方、本丁の挿絵は、義経・朝比奈らによる「地獄の門破り」伝承を描く図柄に類似する。

【巻下】

(一才)

正清はおらんかいにて数多俵物をつみて城くはくとなし敵陣と戦ひ終ニ大将世留兜字須を生捕ニせらる是七尺余の大力の者也

【字釈】○世留兜字須…『清正行状・奇』「キセクヨリ五日路東シ。ロイシウホニ世琉兜字須將軍籠ル由」。

【解説】巻中、七ウ・八オの続き。朝鮮軍記物では、清正軍が米俵を利用して戦ったのは、「北海道兵使韓克誠」率いる朝鮮軍との間で展開された「海汀倉の戦い」であって、一方、セルトウスはオランカ

イの武将として登場する。しかし、偶然にも、韓克誠はセルトウスと同一人物であつて、韓克誠の官職名である「節度使（韓国語の発音はゼルドサ）」が転化して「せるとうす」になつたことが指摘されている。⁽²⁴⁾

(一ウ・二オ)

大將久吉公長州まな板のせとにて船頭与次兵衛が所為にて危き所を鈴木太郎其場ニおり合矢庭に毛利家の船三百つし危難をのがれ給ふ御運の程こそありがたけれ夫より与次兵衛をからめんとするに与次兵衛へはげしく勇をふるひしかなはじとや思ひけん本名明智左馬五郎と名のり海中にとひ入たり此ところ今につたへて与次兵衛がせととなり

【解説】『彦山権現誓助劍』では、朝鮮から渡つてきたと名乗つていた木曾判官が、実は明智光秀であつたとされる。なお、この段落に描かれている事件は、正保三年版『太閤記』への補入以来有名になつた記事。

(二ウ・三オ)

福嶋左近が陣は蔚山より十二町ばかり脇に有其ほとりに一里四方の池あり白鳥あまた群居たり足軽ども是を取んとす或夜蔚山の加藤清兵衛が家臣来りて申けるは只今鉄炮の音しきりに聞ゆいかゞの義二候や左近へんたうしかくのわけを申送る加藤清兵へ此を聞陣中にて入らざるなぐさみな既に味方を騒す事再三也といへどもさのみ憤る躰もなく猶も油断はせざりけり時に大明の大將吳惟忠慮惟忠の兩人五万騎にて左近が陣に押寄す不意の事なれば心得なき福嶋面目なくも蔚山へ逃たりけり

【字釈】○蔚山…秀吉の朝鮮侵略の時、加藤清正軍の拠点であつた。○取んとす…「取んとす」の誤植か。○

入らざる…正しくは「要らざる」。○呉惟忠…『清正記』卷三「蔚山（中略）城中には清正家来加藤清兵衛（中略）大明の大将呉惟忠といふ者」⁽²⁶⁾。慮惟忠は架空人名か。

【解説】白鳥に關するエピソードは、『続撰清正記』卷四、『朝鮮太平記』卷二三などと同様。ただし、これらの作品には、福嶋左近の代わりに鍋島加賀守直茂が登場する。以下、蔚山の戦いが続く。

(三ウ・四オ)

蔚山には加藤清兵衛下知して今よひの鉄炮の音は常ならずとて其用意をぞしたりける呉惟忠は左近をおつかけ付入んとす城中よりさへ出敵勢を谷へ過半突崩す大明の遠甫といふ者踏とまつて清兵衛と戦ひ加藤も郎等九人を失ふ敵を討事其数しらずしかれども味方は小勢なれば前後敵に取まかれ漸三人の郎等を従へたり小代下総三十六人の手勢を率し清兵衛を助け討死しけり佐々平左衛門斎藤立本本鉄炮を敵敷打立ける其時嶋山三有ける浅野長政五百人を率て横鐘に突入て大明勢を追退く清兵衛打て出追かけ散す小勢にて百万の勢を防ぎける

【字釈】○遠甫…架空人名か。○嶋山…蔚山の地名。現在も倭城の跡が残っている。○小代下総・佐々平左衛門斎藤立本…『清正記』卷三「城中には清正家来加藤清兵衛小代下総佐々平左衛門斎藤立本毛利家之者共に筑紫衆にて固めたり」⁽²⁷⁾。

(四ウ・五オ)

順天じゆんてんの城しろには小西せうせい行長ぎやうぢやうこもりける此こゝとき正清まさよしまは順天じゆんてんに着陣ちやくぢんせしにはや行長ぎやうぢやうは大手てを破やぶられて李愬りぢよせう松朱伯榮しゆけいが勢せいおし入いて既に危あやき所ところ正清敵せいせいぢきの後のちを追おたりければ大明勢たいみんせいは鬼者冠おにしやくはんなりと大おほに驚おどろきあはてふためき兵へいを引ひけたり小西せうせい是こゝにて漸やうやく蘇よみがへたる心地ちちせり然しかる所ところへ此垣市兵衛このがきはせ来きたり蔚山うるさんの様子やうすを告つづぐる正清せいせいはより蔚山うるさんをすくはん行長ぎやうぢやうか勢せい諸共兵糧しよどもらうの手当てあてをして順天じゆんてんより引ひかへし蔚山うるさんへ向むかはれる折ひがふし順風じゆんぷうのほり安やすく陣頭ぢんとうに鉄炮大筒てつぱおほづ左右さゆうニ配はり暫時せんじが間まニ蔚山うるさんの東あづまに至いたる明勢みんせい等ら鬼者冠おにしやくはんが来きたりしと上うへを下したへと立たちさはきけり

【字釈】○順天じゆんてん…小西行長軍等の拠点であった。○李愬松…明の將軍である「李如松」のこと。ただし、李如松は、順天の戦いにはすでに帰国していた。朱伯榮は架空人物か。『朝鮮太平記』卷二七などに「牛伯榮」という人物が登場する。○鬼者冠おにしやくはん、「鬼上官」とも。『清正記』卷三「鬼上官と大明国迄も風説す」。

【解説】『朝鮮軍記大全』卷三八、『朝鮮太平記』卷二七以下に当たる。

(五ウ・六オ)

正清まさよしまが兵等大筒へいとうたいしゆんを打入うちいりて道みちをひらく木村又藏きむらまたざうの長策ながさくを討取うとりす、む敵たきを九人迄討取までたり正清せいせい下知げちして鎗やりを入いさせければ明勢みんせいの軍勢大崩ぐんせいだいほんに成なりて引退ひきしりぞく城内じやうぢやうより正清の旗はたを見て加藤清兵衛かとうせいへい佐々平左エ門ささへいざ斎藤立本さいとうたつぽん打うちて出共いでともに敵たきをほらふ正清持参せいせいぢさんの兵糧へいりやうを運はこべしづくと城中じやうぢやうに入いける明の將しやうは是こゝを見て齒はがみをなしいかりけれどもせんかたなく明の楊高やうかう申まけるは正清籠城せいせいろうじやうの上うへは百二十八万の勢せいを以責入共終もつせめいともつひに日本勢にっぽんせいニ打挫うちひしがるべし力責ちからせめは叶かなまじ所詮しよせん兵糧責へいりやうせめニせんより外ぐわいなしとて城外じやうがいを囲かこみけりかくて十二月晦日じふにがつごころ根ねつき城中じやうぢやうの難義なんぎに及び諸卒共申しよそつともけるは明日あしたは元旦げんたん也なりかゝる折をりから古郷こきやうを思おもひ打うちしほれてぞみへにける



【字釈】○長栄・架空人物か。○楊高・明の武将である「楊鏑」のこと。

(六ウ・七オ)

加藤正清我思ふ子細あり 旁必ず歎く事なかれめでたく
 越年させんとて大明の陣中へ使者を遣さる 其趣 正清大
 明の手にとらはれとなるべく問目録の通り兵糧の無心送
 り給はるべしと也 則 正清に繩をかけ右引がへとの口上
 麻貴楊高是を聞兵糧二十輛干魚酒糟其外目録の通送る
 べしと返答す使者は帰り正清へ此旨申上勇士を仲間
 仕立さうじさせ堀の内ニ大筒を伏させ今やくとまち居
 たる百万の軍中より大力の者四十人撰出件の兵糧送り
 物遣す正清は門をひらき此者どもにしばらく出らる中間
 ども兵糧車を手早く引取四十余の力を打すへく手強
 くはたらき大筒を一同に切て放す大明の楊高是を見て大
 におどろき責つゝみをしきりに鳴しけれ大軍一同に押し
 せおめきさげんでたゝかひけり

【解説】 図版⑩。

(七ウ・八オ)

後藤又兵衛敵を追事甚しく全きくはん過て方四五十里の広野に萱生茂りむかふ二小山のかけ二伏勢有をさとり長政す、まんとするをとゞめ風上より火をかける風はげしくさしもの広野一度にもへほとり伏勢共悉く煙にむせび右往左往ににげ乱る村田兵介其さきに切立れば大明朝鮮勢蜘蛛の子をちらすごとく止る者一人もなし味方損亡なく大軍を急にして追退く事全く後藤一人の働きにありと正清大に悦喜し諸勢を揃へふさんかいに至れば日本勢は不残引取各帰朝の用意をそしたりけり

【字釈】○全きくはん…ここは、朝鮮軍記物において、黒田長政軍が勝利を取めた地域とされる「全義館の戦い」が描かれている。『朝鮮太平記』巻二二「全義館二着陣ス(中略) 眇々タル広野ノ中二」。(29) ○ふさんかい…「釜山浦」。「かい」は「海辺・浦」を意味する韓国語「ケ」の転化。

【解説】全義館の戦いは、堀杏庵著の軍記『朝鮮征伐記』(巻七)など初期の朝鮮軍記物に載せられ、『朝鮮軍記大全』(巻三二)・『朝鮮太平記』(巻二二)等に受け継がれる。ただし、この戦いは蔚山・順天の籠城より先に行われた合戦である。この記事が日本軍の帰国記事の直前に載せられることよって、本書の主人公であるはずの毛谷村六助ではなく、後藤又兵衛の活躍が強調されるようになる。

(八ウ・九オ)

加藤正清は異国をことかく切從へ朝鮮の王しゆんといふ者三二人の官人を伴はせ船二のせ帰国し泉州堺の浦に着船すれば本朝の諸将みなく兵船二打のりおひく伏見の城へ相つめ異国責の次第を申上げる久吉公御安堵の御きげん麗しく諸将もよろこびかきりなく朝鮮の官人へも種々御馳走遊ばされ今に絶せず来朝せしとなり

【字釈】○朝鮮の王しゆんといふ者…『清正記』卷三「兩王子臨海君順和君」⁽³⁰⁾、『清正高麗陣覺書』「帝王御兄をばいもはい君と申候、御弟をばしゆのう君と申候」⁽³¹⁾のように、初期の加藤系作品群においては、加藤清正が生け捕ったのは、王子ではなく、王として認識されていた。○今に絶せず来朝せしとなり…朝鮮王朝から徳川幕府への外交使節である朝鮮通信使のことを、江戸時代の多くの日本人は「来貢使・来朝使」として認識した。

【解説】歴史的には、秀吉の朝鮮侵略は、一五九八年（慶長三）の秀吉の死によって終わった。本文のように、秀吉の存命中に日本軍が凱旋したとの記述は、『太閤記』などの作品にも見られるもので、第一次戦争（壬辰倭乱・文禄の役）だけを認め、第二次戦争（丁酉倭乱・慶長の役）を否定する立場である。その立場とは、明との間で結ばれた和議を尊重した日本は、自分の方から戦争を起こすことはなかったというのである。にもかかわらず、それらの作品では、第二次戦争における合戦のこと（蔚山の合戦や順天の合戦など）も述べられていて矛盾する⁽³²⁾。また、加藤清正が朝鮮の二王子を連れて帰国したのも、第一次戦争が終わってからであり、その後、第二次戦争が起こる前に二王子は帰国した。

（九ウ）

大將久吉公朝鮮せい**い**ばつの御よろこびに家臣片岡造酒頭を以住吉明神へ御代参なさしめ給ひ天下泰平五穀成就
 万民あんせんの御祈願に御かくらを捧げ給ひしは目出度かりける次第なり

【解説】『彦山権現誓助劔』第一段を意識した叙述。しかし、『彦山権現誓助劔』では、「朝鮮征伐」の成功を願うための参詣が描かれている反面、本書では、「朝鮮征伐」の成功を祝うための参詣が描かれている。

(十才)

福寿軒絵本目錄 寺町松原上ル丁西かわ北より 菱屋治兵衛板

絵本常盤草まほんときわくご／西川祐信／全部三冊

同千代見草ちよみぐさ／右同断

同見津輪艸みつわくさ／西川祐信／全部三冊

同小倉山おくらやま／右同断

同貝歌仙かいがせん／西川祐信／全部三冊

同鶴の棲つる すみか／右同断

同亀尾山かめをやま／西川祐信／全部三冊

同姫小松ひめこまつ／右同断

同硯の海すより うみ／西川祐尹／全部三冊

絵本響の瀧まほんひびき たき／西川祐尹／全部三冊

同花の宴はな まん／右同断

同若草山わかくさやま／西川祐信／全部三冊

同おさな草おさな くさ小本／右同断

同藤の縁ふぢ ゆかり／長谷川光信／源氏画三冊

同武勇桜ぶゆうざくら／右同断二冊

同武者考鑑むしやかうかん／西川祐信／全部三冊

同武者備考／右同断

同勇士艸／西川祐尹／全部二冊

(十ウ)

絵本筆の山／西川祐信／折本一冊

同筆の海／右同断

同艶すがた／西川祐信／折本一冊

同武者屏風／右同断

同武道要石／西川祐信／折本一冊

同合類絵本鏡／五冊

三十二相姿鏡／西川祐信／女中品定／一冊

本心近道／真一文字／町人身持／教訓書集／全部二冊

絵本武者車／古今勇士の／故事書集／八冊

同勇者車／右の類／後扁／十冊

同笑武者／うき世／おどけ函／三冊

同武者大仏桜／下河辺拾水／全部三冊

同龍門の瀧／全部二冊

同瀧の流／右の書／後扁／下河辺／二冊

同和歌浦大本／全部三冊

同和哥録わかみどり小本／二冊

遍照金剛／秘密国字卦へんせうこんぎょう ひみついろはうぢらかた／平かな小本／占盤添ばんぞく／全一冊

此書は弘法大師秘密の書にていろは八文字を六十四卦となし甲乙を以天文地理を始人間一生の吉凶或は婚礼養子宅がへ又は家の売買商人の交易夢占の吉凶一切の当物万事を知る又は毎年毎月毎日時々の考にいたるまでくはしくしるす

〔注〕

- (1) 「寛政期の浄瑠璃復興」、『岩波講座 歌舞伎・文楽』九「黄金時代の浄瑠璃とその後」(岩波書店、一九九八)二〇五頁。
- (2) 金京欄「韓国」の「論介(ノンゲ)」説話と浄瑠璃『大功艶書合』及び改作について『演劇研究センター紀要』五(早稲田大学21世紀COE演劇研究センター、二〇〇五・一)三一九頁。
- (3) 注2前掲論文、四一頁。
- (4) このような加藤清正系統の諸作品に関しては、阿部一彦『「清正記」諸本の展開』(愛知淑徳大学国語国文)二二、一九九九・三)、拙稿「忘れられた一文芸の系譜―加藤清正伝承から見た「壬辰倭乱物」―」、『国際日本文学研究集会会議録』二八(国文研、二〇〇五・三)を参照されたい。
- (5) 朝鮮軍記物の展開については、崔官「朝鮮軍記物の展開様相についての考察」『語文』一一八(日本大学、二〇〇四・三)、拙稿『絵本太閤記』と壬辰倭乱作品群』、『総研大文化科学研究』三(二〇〇七・三)、同

『懲愆録』と近世文学―朝鮮軍記物とその周辺―』『近世文藝』八八（近世文学会、二〇〇八・七）等を参照されたい。

- (6) 『浄瑠璃名作集』上（有朋堂、一九一七）四四九頁。
- (7) 『豊臣鎮西軍記』早稲田大学出版部、一九一三、三〇・三二頁。
- (8) 国立文楽劇場上演資料集一七『彦山権現誓助劍・良弁杉由来』（国立文楽劇場、一九八八）五六頁。
- (9) 注8前掲書所収。
- (10) 『肥後文献叢書』二（歴史図書社、一九七二）一九頁。
- (11) 注10前掲書、一三頁。
- (12) 注10前掲書、三七頁。
- (13) 慶應義塾大学所蔵本、卷二三「清正作頼輿車事」。
- (14) 『続群書類従』一三上（続群書類従完成、一九九〇年訂正三版）四二二頁。
- (15) 崔官『文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）文学に刻まれた戦争』（講談社、一九九四）。
- (16) 注10前掲書、二二頁。
- (17) 注10前掲書、七五・六頁。
- (18) 注10前掲書、七五頁。
- (19) 注4前掲拙稿を参照されたい。
- (20) 注10前掲書、二七・八頁。
- (21) 国立公文書館内閣文庫所蔵本、卷八、九才。

- (22) 注14前掲書、四二九頁。
- (23) 注14前掲書、四一三頁。
- (24) 池内宏『文祿慶長の役 別編第二』（東洋文庫、一九三六）二五五頁。
- (25) 長谷川泰志「甫庵『太閤記』諸版の成立―正保三年版補入考」『国語と国文学』六八・一（東京大学国語国文学会、一九九一・一）。
- (26) 注10前掲書、四五・六頁。
- (27) 注10前掲書、四五頁。
- (28) 注10前掲書、三二頁。
- (29) 注21前掲書、卷二二、二オ・ウ。
- (30) 注10前掲書、三六頁。
- (31) 『続々群書類従』（国書刊行会、明治四〇）二九九頁。
- (32) 柳沢昌紀「『太閤記』朝鮮陣関連記事の虚構―日付改変の様相をめぐって」、『近世文藝』六五（日本近世文学会、一九九七・一）。

【附記】本書の存在を教えていただいた菊池庸介氏に深く御礼を申し上げる次第である。

正 誤 表

■219 ページ 2 段落目 8 行目～9 行目

誤 弾正は我と一戦を定でたる

一 正 弾正は我と一戦を定たる